

東京・春・音楽祭2020

東京春祭マラソン・コンサート vol.10

ベートーヴェンとウィーン

生誕250年によせて



第1部 ベートーヴェンと革命思想のウィーン

フランス革命やナポレオンの台頭等、ベートーヴェンの生涯を密接に彩る変革の時代。フランスと深い関係にあったオーストリアの帝都ウィーンで、革命思想はどのような道のりを辿ったのでしょうか？

曲目解説

ベートーヴェン(1770-1827)が「自由・平等・友愛」を謳い上げるフランス革命の思想に傾倒していたのは有名な話だ。その大きな結晶といえるのが、政敵に幽閉されていたヒーローをその妻が命がけで救出するフランス発祥の物語に基づいた歌劇《レオノーレ》。1805年に完成初演されたものの、興行的な失敗を受けて再演の機会を狙っていたベートーヴェンが、おそらく1807年に当作品の序曲として作ったのが序曲《レオノーレ》第1番である。囚われの主人公が地下牢の中で歌うアリア「おお……なんという闇だ、ここは！」に登場する旋律等を用いながら、歌劇を彷彿させる内容となっている。

なお、劇的な救出のストーリーを歌劇に取り入れるのは、当時の流行でもあった。ベートーヴェンが尊敬していたイタリア出身の作曲家ケルビーニ(1760-1842)の歌劇《ファニスカ》もその1つ。1805年にウィーンを訪れていた彼が、《レオノーレ》の台本作者でもあるゾンライトナー(1766-1835)作のテキストに基づいて1806年に発表したもので、ベートーヴェン自身から高く称賛されている。こちらは、無実の罪で幽閉されたヒロインが、危機一髪のところ救出されるという内容になっている。あるいは、ベートーヴェンと交友のあったモーゼル(1772-1844)が1813年に完成させた歌劇《ザーレム》も、理想の実現のために闘う悲劇的な主人公が題材だ。

このように、ベートーヴェンの生きた時代には、彼を含め多くの音楽家が、変革の時代に大きな関心を寄せ、それを作品の中に反映させていった。ただしベートーヴェン自身としては、徳のある指導者の下、勃興を遂げつつあった市民階級にも様々な権利が与えられるような社会を理想としていた節がある。まだボン時代の1790年、啓蒙専制君主として名高いオーストリア・ハプスブルク家の当主皇帝ヨーゼフ2世(1741-90)が亡くなると、ベートーヴェンは《皇帝ヨーゼフ2世への追悼カンタータ》を書き、啓蒙主義改革の終焉を悼んでいる。

そうした指導者の姿を、ベートーヴェンは次にナポレオン(1769-1821)へ求めようとしたのかもしれない。にもかかわらず、ナポレオンが1804年にフランス皇帝に即位し

たり、1805 年および 09 年にウィーンを軍事占領したりするに及び、彼への熱狂は逆に失望に変わったと言われている。それでも、ベートーヴェンは 1807 年に完成させた《ミサ曲 ハ長調》の献呈先を、一時はナポレオンにしようと考えたことすらあった。ナポレオンに対する複雑な想いが見て取れるエピソードに他ならない。

(小宮正安)